

**主 題：栄光の希望を見失わないために 8**  
**聖書箇所：ローマ人への手紙 8章35-39節**

「神の恵みにより救われた者は、決して救いを失うことはない。」、パウロはそのことをローマ人への手紙5～8章を通して教えて来ました。このようなすばらしい約束、永遠というすばらしい希望が与えられている、だから、今、問題があっても、困難があっても、しっかりと希望を持って生き続けなさいと、パウロはそのように励ましをするのです。では、私たちがどのようなときも希望を見失わないために必要なことは何でしょうか？それは、神の偉大な救いのみわざ、神の愛を覚え続けることです。すでに、私たちは31節から、私たちに対する神の働きを学んで来ました。パウロは四つの修辞疑問（レトリック）を使って、読者の確信を導いて来ました。もう答えが明らかな質問をすることによって、彼らに確信をもたらそうとしました。

**A. 私たちに対する神の働き 31-34節**

**1. 神は私たちの味方**

神が私たちの味方であるなら、だれが私たちに敵対できるでしょう？

→ だれもできません。

**2. 神は私たちの必要を満たしてください**

ご自分の御子をさえ惜しまずに死に渡された方が、どうして御子といっしょにすべてのものを、私たちに恵んでくださらないことがありましょ？

→ すべてのものものを与えてくださる。

**3. 神が私たちを選ばれた**

神に選ばれた人々を訴えるのはだれですか？

→ だれもいません。もう救われたから。

**4. 神が私たちを贖われた**

罪に定めるのはだれか？

→ だれもない、もう贖われたから。

パウロはこうして、私たちクリスチャンに与えられているすばらしい祝福がどのようなものかを説明したのです。そして、後半の35節から、パウロが与えた第五番目の質問を見て行きます。この質問を通してパウロが訴えること、「あなたは神の愛によって守られ続けている」、何があっても、あなたを神の愛から引き離すものはないと、そのことを教えるのです。

**B. 私たちに対する神の愛 35-39節**

**第5問：私たちをキリストの愛から引き離すのはだれですか？**

→ だれもいません。

このすばらしい祝福をパウロはまず、自分自身の経験を通して私たちに教えようとしています。私たち自身、大変な問題を体験するとき神の愛を疑ってみたり、日々の生活で犯す様々な罪をもって、こんな私を神はもう愛してくださらない、もう神は私のような者に愛を示すことはなくなったと、神の愛に疑問をもつことが多々あります。そこでパウロは、あなたは永遠に神の愛によって愛されていると、そのことを教えようとするのです。

**1. すべてに勝る神の愛 — 苦しみに勝るもの — 35-37節**

**1) パウロの経験 35節**

彼自身が経験した大変な困難、それは35節の後半に記されています。七つのことが記されています。35節「**私たちをキリストの愛から引き離すのはだれですか。患難ですか、苦しみですか、迫害ですか、飢えですか、裸ですか、危険ですか、剣ですか。**」

(1) **患難**：圧迫される、非常に圧力で押し付けられている状態です。

(2) **苦しみ**：余地がない、もう追い詰められてしまった状態、窮屈、急迫した状態です。

パウロはこの二つのことばを並べて、それぞれの意味を私たちがしっかり理解するようにと望んだのではないでしょう。彼が言いたいことは、信仰者として生きているパウロ、信仰者であるゆえに彼は大変な迫害、苦しみを体験して来たということです。皆さんも経験されたように、大変な苦しみを味わっているときはとても苦しいでしょう。重荷が乗ったように圧迫された状態です。ヘンドリックソンという神学者は「この二つのことば、患難は外側、苦しみは内側のこと」と言います。パウロは信仰者として大変辛く苦しい生活を体験していることを言いたかったのです。

(3) 迫害：信仰者ゆえに大変な迫害を経験したことです。

(4) 飢え：十分な食べ物がなかったのです。時には、収監されていて自由がありませんでした。食べ物も十分に食べることができなかったのです。

(5) 裸：着る物が十分になかった、そのような状態です。

(6) 危険：彼はどのような危険に遭遇していたのでしょうか？Ⅱコリント11章に、パウロがここで話していることの細かいリストがあります。11：26-27「幾度も旅をし、川の難、盗賊の難、同国民から受ける難、異邦人から受ける難、都市の難、荒野の難、海上の難、にせ兄弟の難に会い、：27 労し苦しみ、たびたび眠られぬ夜を過ごし、飢え渴き、しばしば食べ物もなく、寒さに凍え、裸でいたこともありました。」、ここに八つの「難」ということばが出てきます。これが「危険」と同じことばです。パウロの信仰者としての生活を見ると、彼は様々な危険に遭遇していました。旅をするといろいろな人たちからいのちを狙われます。しかも、同国民であるユダヤ人から、また、異邦人から受ける危険があったし、都市に行っても荒野にあっても、海の上でもいろいろな危険が待っていました。しかも、「にせ兄弟の」とあります。クリスチャンと称しているがそうではない者たちからのいろいろな迫害があったと言います。からただけでなく、精神的にも疲れきった状態を彼は経験していたのです。

イエスが味わわれたことを私たちは知ることはできません。すべてをお造りになった創造主が人となって、あなたの身代わりとなって、あなたののろいを十字架で受けてくださった、その苦しみを私たちは理解することはできません。パウロの苦しみ、その一つ一つを見て、私たちはそのようなことを経験したこともない、私たちが味わう問題よりもはるかに辛い経験をしたパウロが、自分の経験をもとに語っているのです。

(7) 剣：パウロがこのローマ人への手紙を書いたときにはまだ経験していません。先のⅡコリントはすでに書かれていたので、そこに書かれているパウロが経験した「難」は、ローマ書を書いたときには自分の経験として書いたのです。約1年ほどのギャップがあります。「剣」とは処刑されることですが、彼は後に経験するのです。信仰ゆえに彼は殉教を遂げて行きます。

パウロが言いたいことは、大変な苦しみの連続だったけれど、その経験を通して言えることは「その中で神は私を愛してくださった。神の愛によって私は支えられた。神の愛が私を励ましてくれた。」ということです。

## 2) みことばの約束 困難に会う約束 36節

36節「あなたのために、私たちは一日中、死に定められている。私たちは、ほふられる羊とみなされた。」と書いてあるとおりです。」、この36節のことばは旧約聖書、詩篇44：22のみことばが引用されています。「だが、あなたのために、私たちは一日中、殺されています。私たちは、ほふられる羊とみなされています。」、引用されているのはヘブライ語で書かれた聖書のギリシャ語訳である70人訳を使って、そこから引用されています。詩篇44：22で何を教えているのか？著者は、義なる者たち、神によって罪赦された者たちの苦しみを見て悲しんでいるのです。神に忠実に従っている者たちが辱めを受け、笑い者にされている光景を見て嘆いているのです。そして、パウロはそのことばを引用することによって、ローマにいる人々に、信仰者として歩んでいるあなたたちも、旧約の信仰者と同じように、信仰ゆえにいろいろな困難を経験をしていると言うのです。そのことによってパウロはローマの兄弟姉妹たちに、いろいろな困難、問題を避けて通ることは不可能だ、実は、それらは私たちに約束されていると言うのです。イエス・キリストを信じている者たち、本当にこの主イエス・キリストを信じた弟子たちは、その信仰ゆえに必ず苦しみを経験すると言うのです。だから、今経験していることを恐れ怪しんではならない、不思議がってはならない、約束されているのだからと。ピリピ3：10でパウロはこのように言っています。「私は、キリストとその復活の力を知り、またキリストの苦しみにあずかることも知って、キリストの死と同じ状態になり、」、私はイエス・キリストを個人的に知っている、同時に、イエス・キリストの復活の力も知っている、イエス・キリストが十字架上で身代わりとなって死んでくださっただけでなく、三日後に死よりよみがえってきたその復活の力です。イエス・キリストが死から敢然とよみがってきたという出来事は、イエス・キリストがだれであるか、神であることを明らかにしました。そして、死からよみがえってきたという行為は、イエス・キリストを信じるすべての者の罪を完全に赦してくださる救い主であることを明らかにしました。同時に、イエスを信じた私たちに、信仰者として生きて行くために、その歩みを実践するための力がイエスにあることも明らかにされたのです。

だからパウロは、私はイエス・キリストを信じて、十字架で死んでよみがえられたイエスの力を知り、その力によって信仰者として生きて行くことができる、そのような者に私は生まれ変わったと言うのですが、それで終わっていません。「またキリストの苦しみにあずかることも知って、」、私たちイエス・キリストを信じた者は罪赦されて、神の力をいただきながら信仰者として生きて行けるという祝福をいただいているだけでなく、実は、私たちはイエス・キリストのその苦しみまでもいただいていると言いま

す。だから、私たちはいろいろな苦しみを経験するのです。主に忠実に従おうとすればするほど、私たちは苦しみを経験します。でも、苦しみは確かにありますが、そこにはそれに勝る慰めがあるのです。大変な問題を経験しても、そこにあつて神は私たちを慰めてくれます。恐らく、皆さんはそのことを経験されているでしょう。

また、同時に、このような苦しみは私たちの信仰の真偽を明らかにします。本当に救われているのかが明らかになります。多くの人たちは、問題がなければイエス・キリスト！と言ってそのような集まりに参加しても、信仰ゆえにいろいろな問題が生じて来ると、そこから離れてしまいます。マタイの福音書13章に記されている四つの「種蒔き」のたとえ、13：20-21にイエスの説明があります。「また岩地に蒔かれるとは、みことばを聞くと、すぐに喜んで受け入れる人のことです。」、この人は神のおことばを聞いたときに喜んでいいるのです。拒んでいません。しかし、21節「しかし、自分のうちに根がないため、しばらくの間そうするだけで、みことばのために困難や迫害が起こると、すぐにつまずいてしまいます。」、つまり、信仰者として歩んで行く過程でいろいろな問題が出て来ると、徐々に、離なれていってしまうのです。それは「根がない」から、つまり、救われていないからです。信仰をもったと言って教会の様々な集いに集まり、バプテスマを受け奉仕の活動をしていても、問題が生じて来たとき、信仰ゆえに困難が生じて来たときに、救われていない人はそこから離れて行くというのです。だから、いろいろな困難はその信仰が本物かどうかを明らかにするのです。ですから、イエス・キリストを信じるということ、また、イエスの弟子となるということは、困難を覚悟しなければいけないのです。

同時に、感謝なことは、主はあなたが耐えられる試練しか与えないということです。私たちを愛する神は私たちの弱さを知っておられます。その私たちに神が敢えて試練をくださるのは、もう何度も学んで来たように、私たちがその試練を通して成長するためです。私たちがイエスに似た者に変えられて行くために、神はすべてのことを働かせて私たちの益のために為してくださるのです。ですから、私たち信仰者は確かにイエスを信じることによってすばらしい永遠の約束が与えられますが、この地上にあつて私たちはいろいろな困難を経験します。でも、その困難も私たちが耐えられないものではないのです。そして、与えられるすべての困難は私たちが成長するためなのです。そのことを聞くと私たちは神を信頼せずにおれません。それが神の約束なのです。そのような計画をもって神はすべてのことを為しておられるのです。いろいろな困難に遭遇したとき、私たちは神を疑うのではなくこの約束に立って「神の約束はこうだから私はそれを信じる」とそのような歩みをもって、私たちの信頼を現わして行くことです。しかし残念なことに、聖書を知っていながら救われていない人がいます。何度も私たちが学んで来たように…。

我が家もクリスチャンホームです。子どもたちを見ているといろいろなことを考えます。幼いときから聖書を学んでいますから、霊的な質問に対する賢い答えを知っています。だから、質問するとちゃんと正しい答えが返ってきます。問題は答えを知っているけれど、主を知っているかどうか、賢い答えをもっているけれど、イエス・キリストを心にもっているかどうかです。いろいろな困難を通して信仰の真偽が明らかにされて行きます。パウロは自分の生涯を振り返って、そこにあるいろいろな困難、苦しみを証し、そのすべては神が約束されたものだと言い、そして、37節で自分の証を述べるのです。

### 3) パウロの証 勝利の源 37節

37節「しかし、私たちは、私たちを愛してくださった方によって、これらすべてのことの中にあつても、圧倒的な勝利者となるのです。」、「圧倒的な勝利者となる」とおもしろいことばが使われています。前置詞の「～以上」と「勝つ」ということばの合成語です。勝利者以上である、勝って余りある、別の辞書を見ると、最も栄誉ある喜ばしい勝利を勝ち続けている、とそのようなことばが使われているのです。つまり、ここでパウロが言いたかったことは、いろいろな問題があつてもその中で私たちはいつも勝利を続けることができるということです。37節には「これらすべてのことの中にあつても、」とあります。パウロが説明したように、彼自身が体験したこと、いろいろな問題が大なり小なり起こってくるけれど、それらすべてのことの中にあつて、私たちは勝利できるということです。それは「私たちを愛してくださった方によって、」できるのです。私たちのうちに力があるわけではありません。いろいろな困難に私たちは私たちの力で勝利できるのでしょうか？できません。パウロが言うように「私たちを愛してくださった方」の力、助けによって勝利できるのです。信仰生活は私たち自身の力、知恵、経験ではなく、いかに神に依存して生きるかということです。「神さま、私には大変な問題があります。でも、約束されたように、このすべてのことは私の成長のためだから、しっかりこのレッスンが学べるように助けてください。この中にあつて正しい選択ができるように助けを与えてください。私の心を悪い考えや悪から守ってください。」と、そのようにしてしっかりそのレッスンを学んで行こうとするのです。

ときに、そのレッスンは私たちにとって辛いものがあります。私がちょうど宣教師としてグアム島へ行ったとき、行く前にどのような取り決めがあつたのか、私は日本に戻って半年後にグアムへ行くこと

になっていました。翌年の4月に、言われていた通りにグアムに戻ったときに、宣教団体の支配人が代わっていました。そうすると、彼らは「なぜ帰って来たのか？」と問い、その後、数ヶ月間、私はグアムに滞在するのですが、そのときに泊まる所を転々と移動しました。ここで一週間、ここで数日間と、私はアメリカでサポートを集めてグアムへ送られたのです。他の宣教師と同じように、住むところが提供されて、いつもスーツケースを引っ張りながらの生活ではなく、どこかに腰を据えて生きる生活が約束されていたにもかかわらず、そのようではなかったのです。自分が言われていたことと違うと段々といろいろな思いが出てきます。正直、そのとき私はこれならもう宣教師を止めようと思っていました。辛いことがたくさんあったからです。皆さんもご存じのように、スーツケースをもって宣教しながら、自分の家はどこか分からない、だれかの家の間借りをしながらと、余り良くない状況です。そのときに、神はヘブル人への手紙12章のみことばを通して、そのような懲らしめには目的があることを教えてくださいました。すべてのことには目的があると、ヘブル12:10「なぜなら、肉の父親は、短い期間、自分が良いと思うままに私たちを懲らしめるのですが、霊の父は、私たちの益のため、私たちをご自分の聖さにあずからせようとして、懲らしめるのです。」「私たちをご自分の聖さにあずからせよう」と、私たちがイエス・キリストに似た者に変えられて行くために、罪を犯せば神は矯正なさるし、私たちが日々神とともに歩んでいるなら、その聖さにおいて成長するようにと、神はいろいろな試練を与えてくださるのです。その試練の目的、その大変な状況の目的が分かったときに感謝が出て来ました。神さま、こういう計画があったのですね、感謝しますと。それから私はこのように確信する者になりました。今、私たちが見ているように、確かに、いろいろなことが起こりますが、神が知らないことは何もない、神はちゃんと約束されたようにあなたに必要なことを与えられます。私たちはどのような状況にあってもしっかりと主の約束に立つことです。Ⅱコリント12:9-10に「しかし、主は、「わたしの恵みは、あなたに十分である。というのは、わたしの力は、弱さのうちに完全に現われるからである。」と言われたのです。ですから、私は、キリストの力が私をおおうために、むしろ大いに喜んで私の弱さを誇りましょう。:10 ですから、私は、キリストのために、弱さ、侮辱、苦痛、迫害、困難に甘んじています。なぜなら、私が弱いときにこそ、私は強いからです。」とある通りです。また、イエスはこのように言われました。ヨハネ16:33「わたしがこれらのことをあなたがたに話したのは、あなたがたがわたしにあって平安を持つためです。あなたがたは、世にあっては患難があります。しかし、勇敢でありなさい。わたしはすでに世に勝ったのです。」。

この35-37節に、パウロは神の愛について教えるのですが、その中でも特に、私たちの神の愛はすべてに勝る愛だと言います。だから、どのような困難、患難、問題であっても、神の愛はそれらに勝ると。だから、その状況にあっても勝利する力を私たちに与えてくれるのです。恐らく、皆さんもそのようなことを経験なさっていることと思います。そのとき、辛いとき、悲しいとき、絶望の中でも、神は私を愛しておられると教えてくださいました。そして、その真実が私を励ましてくれます。私はひとりではない、神が私を愛してくれるから、この辛い苦しい中であっても、神は私を愛してくれると。パウロもそのことをちゃんと知っていました。神の愛はすべてに勝る愛だと。

## 2. 変わることはない愛 38-39節

38-39節「私はこう確信しています。死も、いのちも、御使いも、権威ある者も、今あるものも、後に来るものも、力ある者も、:39 高さも、深さも、そのほかのどんな被造物も、私たちの主キリスト・イエスにある神の愛から、私たちを引き離すことはできません。」、何ものも私たちを神の愛から引き離すことはできないと言います。ここに10個の「引き離すもの」が並んでいます。私たちを神の愛から引き離す可能性のあるものです。その中の八つは対比する形で出て来ます。二つは対比に関係なく記されています。パウロがここで言いたかったことは、この一つ一つを詳しく説明しようとしたのではなく、いかなるものもあなたから神の愛を引き離すことはできないということです。そのことを教えたかったのです。そこでパウロがしたことは、いくつかのことを上げながら、何ものも引き離すことは絶対にできないと教えるのです。

### 1) 死といのち(対比) :

私たち人間にとって最も歓迎できないものは「死」です。私たちクリスチャンでも愛する者といつまでもいっしょにいたいという思いがあります。その愛する者が天に召されたときに、確かに悲しいものですが、この「死」は私たちクリスチャンにとって絶望ではありません。パウロはこのように言いました。ピリピ1:21「私にとっては、生きることはキリスト、死ぬこともまた益です。」、なぜ、死ぬことが「益」なのでしょう？23節にその答えが記されています。「私は、その二つのものの間に板ばさみとなっています。私の願いは、世を去ってキリストとともにいることです。実はそのほうが、はるかにまさっています。」と、私たちクリスチャンにとって「死」というのはイエス・キリストとともにいることです。Ⅱコリント5:8でも「私たちはいつも心強いのです。そして、むしろ肉体を離れて、主のみもとにいるほうがよいと思っています。」とあります。私たちは死を宣告されたとき、その瞬間に主のもとにあります。イエスとと

もにいるのです。そのことを知っていたパウロは、地上においては神から与えられた務めがあるが、私が肉体的な死を迎えたとき、その瞬間、私はイエスとともにいてともに過ごすと言うのです。愛する者との別れは辛いし大きな悲しみですが、主イエス・キリストの恵みによって救われていた私たちの愛する者、彼が召されるなら彼は主のもとに行くのです。そして、恵みによって救われている私たちも同じところであって、彼らとともに永遠を過ごすのです。私たち信仰者にとって「死」は恐怖でもなんでもありません。主のもとで主とともに永遠を過ごす、これはすべて神の愛によって為されたみわざです。永遠の滅びに向かって当然な者、地獄こそがふさわしい私たちを救い出してください、こんなすばらしい祝福をくださったのです。ですから、この「死」という大きな出来事を経験しても、その「死」が私たちをキリストの愛から引き離すことはできないのです。私たちを愛してくださったお方のもとへと迎えられるのです。だから、私たちは「死」を待望するのです。自分で自分のいのちを断つことは罪です。私たちは「死」を迎えるときにすばらしい約束が与えられることを知っています。

また、この地上にいても私たちは神がともにいてくださることを知っています。詩篇23：4のみことばを覚えておられるでしょう。「たとい、死の陰の谷を歩くことがあっても、私はわざわざを恐れませんが、あなたが私とともにおられますから。あなたのむちとあなたの杖、それが私の慰めです」、なぜわざわざを恐れないのですか？「あなたが私とともにおられ」るからです。地上の歩みにおいても神がともにいてくださるし、地上の歩みを終えたとき、私たちは私たちを愛してくださったお方のもとへ引き上げられるのです。「死」をもって私たちが神の愛から引き離すことはできないのです。

## 2) 御使いと権威ある者(対比)：

これらも対比されています。「御使い」とは「天使」のことです。そうすると、この「権威ある者」とはいったい何でしょう？その説明の前にその後を見てください。「力ある者も」、「高さも、深さも」とあります。結論から言うと、これらすべては霊的な存在です。御使いたちのことです。「権威ある」とは「初め、支配」という意味があることばです。「支配」は人間が支配するというだけでなく、霊的な存在にも適用されるのです。単純に見ると、天使があつて、権威ある者とは霊的存在として用いられるものであれば、御使いと権威ある者はどちらも霊的な存在と見ることができます。また、エペソ6：12ではこのことばがこのように使われています。「私たちの格闘は血肉に対するものではなく、主権、力、この暗やみの世界の支配者たち、また、天にいるもろもろの悪霊に対するものです。」と、これは悪霊のことです。ですから、パウロは「御使いと権威ある者」、つまり、天使たちと罪を犯した天使たち、悪霊たちのことをここで対比していると思うのです。

## 3) 力ある者：

このことばもある行動を行なう能力、力、力あるわざ、支配者、超自然的な力という意味をもっています。そのような存在です。超自然的な働きを為すものたちです。Ⅱテサロニケ1：7に出て来ますが、これも恐らく天使たちのことを指しているのでしょう。「苦しめられているあなたがたには、私たちとともに、報いとして安息を与えてくださることは、神にとって正しいことなのです。そのことは、主イエスが、炎の中に、力ある御使いたちを従えて天から現われるときに起こります。」

## 4) 高さも深さも(対比)：

これは神学者の間でいろいろな説があります。恐らく、ここでパウロが言わんとしたことは天使に関することです。なぜなら、レオン・モーリスという神学者が言うのですが、ここで使われている「高さ、深さ」ということばは、実は、占星術においてしばしば使われることばであると。古代社会においては、人々は星の圧制に付きまとわれていると考えたのです。彼らは、人はある星のもとに生まれ、それによって彼の運命が定まっていると信じたのです。今でも私たちは聞きます。このような星のもとに生まれた…と。「高さ」は星が一番高いところに達したときのことで、その影響が最高に強力なときだと言います。「深さ」は星がもっとも低いところに達して上昇を待ち、その影響をある人々に及ぼそうとしている状態だと言います。その当時は、このようなことを信じている人たちがたくさんいた社会だったのです。パウロは、このようないろいろな考え、いろいろな間違った教えがあるが、たとえ、そのような教えであっても、あなたたちを神の愛から引き離すことはできないと言うのです。良い天使たちと悪い天使たち、確かに、悪い天使たちは私たち信仰者が間違った方向に進んで行くようにと誘惑しますが、なぜ、良い天使が妨げとなるのでしょうか？コロサイ2：18を見ると、その当時、天使を崇拜する人々がいたのです。「あなたがたは、ことさらに自己卑下をしようとしたり、御使い礼拝をしようとする者に、ほうびをだまし取られてはなりません。彼らは幻を見たことに安住して、肉の思いによっていたずらに誇り、」、このような考え、このような教えが人々を惑わすことがあります。

そこで、今までのことをまとめると、私たちが普通思うのは、この十個のリストのうち五つも霊的な存在であること、なぜ、それらに時間を費やしたのかということです。ダグラス・モーという神学者はこのように言っています。「1世紀において人々は、東洋の宗教、神秘主義、占星術に惹かれていた。

多くの人々は、自然界、人間界が星を含めて霊的存在によって支配され、影響を受けていると信じていた。だから、パウロは敢えてこれに時間を費やしたのだ。1世紀の人々はこのような教えによって振り回されていた。」と。だから、パウロは時間を取って、支配していると思っている天使やいろいろな霊的存在、それが何であろうと、それらが神の愛からあなたを引き離すことできない、それがどんなに人々によって強力な存在だと言われても、それらがすべてのことに影響を及ぼしていると言われても、たとえば、そのような存在がいたとしても、それらはあなたをキリストの愛から引き離すことはできないと言うのです。つまり、キリストの愛は、その当時の人々が信じ重んじていたものよりもはるかに力があると言うのです。あと二つあります。

#### 5) 「今あるもの」と「後に来るもの」(一対) :

恐らく、ここで言われていることは歴史上の人物、出来事のことです。だれであろうと、何が起ころうと、あなたをキリストの愛から引き離すことはできないのです。

#### 6) どんな被造物も :

パウロは、たとえば、死であっても霊的な存在であっても、たとえば、地上の人物であつたり出来事であつたり、また、それ以外のすべてのことと言うのです。つまり、彼は、どんなものをもってキリストの愛からあなたを引き離すことはできない、あなたはキリストの愛によってしっかり守られていると言うのです。完全な神の完全な愛です。永遠なる神の永遠の愛です。信仰者の皆さん、あなたはそれによって守られているのです。あなたはその愛でもって愛されているのです。パウロはそのことを忘れていないのです。その証拠にこのような証をしています。Ⅱコリント5:14「**というのは、キリストの愛が私たちを取り囲んでいるからです。私たちはこう考えました。ひとりの人がすべての人のために死んだ以上、すべての人が死んだのです。**」、パウロは彼自身が真剣に主に従い続け、主のすばらしいみこころに従い続けて行った、なぜなら、キリストの愛、それが自分の信仰者としての歩みの原動力となっている、つまり、パウロは神が私のことを神の愛でもって愛してくれている、永遠の愛、完全な愛で愛してくれている。失敗ばかりするけれど、神は私を愛し続けてくれている。その神の愛を見、そして、あの十字架を見たとき、それは私の身代わりであり、主なる神は私ののろいを受けてくださった。それを思ったとき、彼はその神に対する愛で心が満たされて、神のために生きようとしたのです。

しなければならぬからしたのではありません。何かもらいたいからしたのでもありません。神を愛するその愛が、彼の働きを生み出して行ったのです。キリストの愛を覚えて人々、その人たちは希望をもって生きる人たちです。なぜなら、その人たちの心は神に対する感謝で溢れているし、神に対する愛で溢れているからです。パウロがここで私たちに教えてくれたこと、それは、イエスによって救われているなら、あなたは永遠の愛によって愛されているということです。それが私たちに神がくださった祝福です。この愛は変わることがありません。愛し続けてくれているのです。だから、私たちはしっかりと十字架を見上げなければいけません。血を流しいのちを捨ててくださったイエスをいつも覚えなければいけない。いつも主が、わたしはあなたのためにこれをした、あなたを愛していると言われます。そのとき、私たちが考えなければいけないことは、この主に対してどのように応答して行くかということです。私たちは自分の生き方をもってこの方に従って行くのです。この方に従う忠実な歩みこそ、私たちの愛の証です。この方を愛してこの方のために生きて行くその生き方こそ、私たちの主に対する愛の証です。問題はそのような生き方をしているかどうかです。もう少し下がって、私たちの心は神への感謝で溢れているのかどうかです。私たちはこの神の愛に感謝しているのかどうかです。私たちの心は神への愛に満たされているのかどうかです。

私の親しい友人が、グレイシア・バーナントのインタビューについて教えてくれました。このグレイシア・バーナントはご主人とともに17年間宣教師としてフィリピンで働かれた婦人です。ご主人は宣教師のパイロットとしていろいろなところにいる宣教師に物資を届けたりする働きをしていましたが、2001年、テロリストに誘拐されて1年間、彼らは拘束されました。その彼女に友人がインタビューをして、このような話を聞いたと言ってくれました。残念ながら、二人が逃れるときだれかからの一発の銃弾によってご主人はその場で召され、彼女だけがアメリカに戻りました。1年間捕らわれの身であったその最後の頃、彼らはその共産ゲリラたちにラジオを貸してほしいと頼みました。それまでは恐ろしくてそんなことは言えなかったとのことです。宣教団体では、ある地域ではもし捕えられたときには何をすべきか、何をすべきでないのか、言われた通りのことをするように、ゲリラたちを怒らせてはならないと教えられていたので、彼らに何かを要求することなどできなかったのです。1年経って、ラジオを求めました。神様はそのラジオを使って彼らにみことばを届けてくれました。クリスチャンの放送を聞くことができたのです。その最初に聞いたメッセージが、実は、今私たちが学んでいるローマ書8章のみことばでした。特に、34節の「**主イエス・キリストが私たちのためにとりなしをしてくださる**」と聞いたとき、彼らは顔を見合わせて言いました。「もう私たちはだれも恐れぬ。この兵

士たちも恐れな。神が私たちとともにいてくれるのだから、こんな励ましは他にないから！」と。

私たちはそのような状態に置かれることはないでしょう。彼らはそのような過酷な中であっても、神の愛は変わらなかったと言います。私たちはこのような祝福を神からいただいたのです。神の愛によって私たちは愛されているのです。神はあなたを永遠の愛をもって愛しておられるのです。だから、信仰者の皆さん、私たちは希望をもって生きるのです。私たちはこの方にお会いする日が近づいているのです。そのことをしっかり覚えて今日を正しく生きることです。主に感謝をもって、主に喜びをもって、永遠に私たちを愛してくださる神、私たちが払いきれない代価を払ってくれた神、永遠のすばらしい住まいを備えてくださった神、私は愛されている、あなたも愛されているのです。問題は、私たちがこの神を愛しているかどうかです。心から神を愛する者としてこの場から出て行くのです。このすばらしい神を誇り伝える者として出て行ってください。外には、まだたくさんの方がこのニュースを知りません。このお方を知りません。私たちには大切な務めが与えられています。この神の愛を伝える者として、神を愛を伝えるという務めです。